



## 新しい方法論の確立

### 革命観論争の発展のために

一昨年末に提起した古典的革命観からの解放をめぐって、昨年一年をつうじて論議が交わされ、去る十一月の連盟総会でも、それが主要な論題の一つとなつた。この革命観論争が理論上の探究を二歩進めることが役立つたことは、前鳥の連盟総会の報告にもみえている。しかし、それがあくまで一步であつて、新しい状況に即応した現代アナキズムの理論を創造してゆく作業は、今後のわれわれの努力に待たなくてはならない。

### 近代アナキズムの

#### 二つの方法論

新しい革命観、新しいアナキズム理論を生みだしてゆくにはどうしたらよいか。ただ思いつきをぶつけ合い、夜を徹して議論し合つていれば、そこから自らはにか新しくものが生まれてくるのだろうが、コミュニケーションをかさねることには、理論活動にとって矢張りのできよい要素であろう。しかしそれだけでは理論が空回りする危険がある。理論活動にとって矢張りのできよい方法で問題に接近し、それを解明していくか、その方法がまず問われなくてはならない。古典的革命観からみずからを解放して、新しい革命観を創造してゆくには、その方法を確立し、それに

もどりして論理をもひもほしてみると、一口に自然科学的方法といつても、十九世紀的自然科学と二十世紀的自然科学とは質的に異つており、社会工学の仕事がそのままクロボットキンの擅場した方針によつてつらぬかれているとは言いがたい。しかし、社会学、心理学、人類学等々の人文諸科学を総合してゆく方向をもつ社会

### 広く自由な視野

#### からのアプローチ

によって社会現象を解明していくことによって、社会現象を理解していくことである。それが、大きな関係をもつように見えるから、大きな関係をもつようにながえられる。

ところで、近代アナキズムを持長づける方針論的視点として、もう一つのものが一貫して継承されてゐる。それは美學的あるいは美的方法でもうべきものである。

その代表的な業績として右川三四郎の「社会美學としての無政府主義論」があるが、それ

#### 前へ歩くこと

#### 行動にも理論にも

(以下続刊)

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

第4巻・文芸論集

第5巻・文芸論雄II(翻訳)

第8巻・第9巻・革命家の思い出/クロボットキン(翻訳)

第10巻・相互扶助論/クロボットキン(翻訳)

第11巻・自殺伝

第12巻・日本脱出記/獄中記/書簡集

第13巻・人生について

（以下続刊）

第1巻・青年に訴つ

第2巻・第3巻・アナーキズムの哲学I・II

</



# 海外情報 スペイン

---

シ・フォン  
ン的なもの  
ストに意見

一 スペイン  
海 外

九月四日付「カンディード」紙（フランス）は、スペインの監獄に幽閉された三人のフランス青年アナキストについて報じている。彼らはフランコ政府へ抗議として爆弾を投げたか、投げようとしたために投獄された。二十二才のギイ・バトゥーは夏休みを利用してスペインのマドリドへ出かけた。ところが突然彼が逮捕されたという知らせがフランスへ届いた。フランス青年がスペインで何をしたといふのか、スペインの警察はいう。バトゥー青年はアメリカ大使館の前に爆弾を仕掛けようとした。彼は訊問に対し決然といい放つ「僕はアナキストだ」。彼はマドリドの監獄で他の一人のフランス青年に会う。十七才のアラン・ペキニアと十九才のベルナル・フェリ。彼らも似たような行為のために投獄された。

ここで記者アレグザンドル氏は疑問を提出する。一九二二年の現在、それら一代の青年がどうしてアナキストになつたのか。しかもなぜフランスではなくスペインで行動したのか。彼はラヴァンショルが与論をわかつた時代のフランスと現代との違いを指摘する。現代のフランスには既にアナキストの活躍する余地はない。おそらくそれら青年達はスペインにその地を見出したのにちがいない。現代のフランスではアナキズムを公然と主張し、また黒旗をかかげて行進しても逮捕されるようなことはない。彼らは自己主張のためにテロに訴える必要はなくなつた。それにも拘らず問題の青年達はテロに走つた。なぜか。

記者はフランスにおけるアナキズムの現状を、そこにはどこの国でも見られるようにいろいろ雑多なものが同居していて、それが本当のアナキズムなのかわからないと書いている。アルコサンジカリズム、個人主義、自由共産主義、ルイス・ミシェル団、セバスチャ

# 情 報

# アフリカ

# 日の反戦旅行

## 春には来日

# 「行動の会」 発足を呼びかけ

現実とは何か、をパラドックに問い合わせようとするものです。間の内面的把握を目指す次の一ムの名で括出来ると思いますなわち、一九世紀の象徴主義、耽美主義などの世紀末思想、世紀のダダイズムとシュールリズム等。これら過去及び現諸思想を研究、批判し、克服後に開けるであろう新地平に僕らのネオ・ロマンティシズム道が浮彫りされるでしょうなお左記へ御連絡下されば「・ロマンティシズム宣言」をりします。また機関誌「ネオ・ロマンティシズム研究」成石勘二郎について神崎社会党フッパ節添田

# 大逆事件記

# クロンスタッフ

## 一九二一年(14)

ヴォーリン

谷千香子訳

さういふ悪いひとが、ボリシェヴィキは、これらの目的の遂行はおくれるだらうと、自分たちで言つてゐた。彼らの考へは、だからひとえにこの問題、「我々の支配を、手をふねずにそのまま維持するには何をしなければならないか」ということじばかりなのだ。

経済の分野において一時的に讓歩すること、「権力」——これこそ彼らの最初に解決する問題だ——の分野を除いてすべてにおいて讓歩を認めること。彼らのただ一つの「讓歩」は人びとの不満をしめるように骨を投げ与えることだつた。彼らは不満が表面に現われたときだけはほんの少しばかりの満足を与えるべからず。必要な讓歩を認めること、彼らの「後退」の限界をうめることができた。彼らはついにこの讓歩の範囲を確立した。そしてそれから、歴史の皮肉のもつとも奇妙な事柄の1つによつて、レーニンと彼の党とは、彼らが誤つてクロンスタッフの人びとのためにし、そのためクロンスタッフは彼らと戦わなければならなくななり、あんなに多くの血を流させたまさしくその計画を採用したのだ。レーニンは有名な「新経済政策」(ネップ)を宣言した。これはある「経済的自由」すなわち、私的商取り引きと生産活動のある態度の自由を民衆に認めたのであった。

このようにクロンスタッフ反乱の要求した「自由」の真の意味は完全に歪曲された。労働者大衆の自由な創造的建設的活動、彼らの完全な解放までつけ、それをもつと早めるように進んでいくことを許すよつた。クロンスタッフの要求でもあつたそういう活動にかわつてネップは個人が富を得るために商売し事業をするそういう「自由」なのだった。しばらくの間ソヴィエトの新興成金ネップマンが現われたのはこのころであった。ロシアと諸外国の共産党員たちは三月事件によつて動搖させられた

位置を堅固にするために一息つくのに党にとってやむを得ないものである独裁制を容認する「戦略上の後退」として、またブレスト・リトウスクの時の「戦時態勢の」時の中止」と似たような一種の「経済的時中止」としてネップをながめ説明した。

実際ネップは【革命的方向へ】後になつてよりよく前進できるためにはなく、反対に出発点へ、同じじくもつた党独裁へ、同じよう無制限の率制主義へ、新しい資本家国家による労働者大衆の同じような支配と利用へとよりよく逆戻りできるための休止以外の何ものでもなかつた。ボリシェヴィキはクロンスタッフ事件を一度ぐりにかえざないよつともつと膨大な番人を伴つて全体主義的国家資本主義への道へようよくもどれるようになつて後退したのだ。

後退の期間、この発生しかけた資本主義国家はこの危険にそなえてマジノ線をつくつた。ボリシェヴィキはネップの数年間をその物質的軍事的勢力を増大し、徐々にボリシェヴィキの行政的官僚的警察「装置」、役柄に合つた新ブルジョアジーをつくりあげ、その「鉄腕」ですべての人びとを押しつぶし、全国に全体主義的収容所と牢獄をゆきわたらせるほど強くなれるようになつた。

もしもこの意味において戦略上の後退を語ろうとするなら、それはまさにここに生じたところのものであつう。(一九二四年に)レーニンが死んで、党内でのいくつかのもめごとのちに「スター・リンの後継がきまつてじき」、新経済政策は圧殺され、「ネップマン」は逮捕され、追放または銃殺され、彼らの品物は没収された。そして完全武装され、官僚化され、資本主義化され、「装備」によって強力な特權的な上等な食物に恵まれた階級によつてさえられた国家はその完成された国家の全能を決定的に確立した。(つづく)

